

## 熊野地方に於ける仏教展開の特質

竹 内 堅 丈

熊野地方に於ける仏教諸宗の展開状況をふまえつつ、特に曹洞宗の教線拡大について考察を試みるものであり、その年代としては、十五世紀より十七世紀中期までが中心となる。

当地を範圍とする地域の各宗派寺院数からみると、約九割を占める曹洞宗の教線伸長の特徴が一層明確なものとなっている。当地における各宗派の展開の特質を次にあげる。

真言宗、当地域へは十六世紀から十七世紀にかけて曹洞宗寺院が多数、法地開山されている。しかし、その前身の寺院宗派としては真言宗であつたと思われる所が少なくない。また当地域は、それ以前においての宗教事情からみると熊野三山の周辺地帯であることから修験道の担当した部分が多く、神仏両面にわたる彼らの性格、宗教内容からして、当地方庶民のいわば雑習的性格として合致して、また彼らによってどのように教化されたものと思われる。その宗教的内容は、加持祈禱による除災、治病、祖霊の鎮魂など多岐にわたり、まさに密教的要素の強いものであつたといえ、この点は従来の

曹洞宗の密教的といつてよい法会の在り方にも連なり、真言宗寺院を転宗させても、そこにおける宗教的活動に何ら障害を生じなかつたと思われる。

天台宗、現在のところ当地域における教線の伸長と衰退などについての明確な資料を、見い出すに至っていない。

浄土宗、活発な教線の伸びはみられず、僅かに尾鷲市、熊野市にそれぞれ念仏寺、称名寺が残存しているのみである。浄土宗の皆無である当地方へ僅かに進出できたのは、慶長年中、当地が浅野忠吉による町割りの際に商業地として発展したことにより他地方から移住した人々の中で、有力者の宗旨が浄土宗であつたことによると思われ、開創者の経済的基盤が存在に連らなつたといえる。また熊野地方は早くから熊野権現いわゆる熊野三山と、伊勢神宮との二つの大きな影響を受けた所であり、北牟婁郡北部に伊勢神宮の御園、御厨が存在し、また旧南牟婁郡の地は熊野権現の神領であつたので、いわばこの地域は神国思想を奉ずる宗教勢力の強い地域であ

ったといえる。それに対して理念的には浄土宗、つまり法然の専修念仏などは現実の世間を五濁悪世と規定しており、日本古来の神々を尊重し、自然崇拜に近い形態を示しているこの地域に確固たる権威を築いている神国思想と鋭く対立することになり、古来の神々の権威に背を向けて現世を穢土として厭離する浄土思想が、伊勢地方同様この地域においても、浄土宗展開に大きな影を落したことは容易に推察できるのであり、結果として教線の伸長は殆どなく、三重県全体からみても勢中から勢北にかけてその重点が置かれていたといえる。

浄土真宗、主力はほとんど津市一身田の専修寺を一大拠点とした勢北に展開しており、その地においては他宗派を寄せつけない強力な教線が構築されている。その流れが勢南地方までは流入し得たといえるが、この地域においては僅かに五ヶ寺を数えるだけにとどまっていることから熊野地方に下っては、その勢力はほとんどないといつてよい。

臨済宗、熊野地方には七ヶ寺あり、そのうちの一ヶ寺が熊野波田須にあり、和歌山新宮の成林寺末で、他の六ヶ寺は新宮と隣接する紀宝町にあり、明治になって妙心寺派に統合された興国寺派寺院である。熊野地方での教線拡張というより、和歌山県側にその教線の伸長があり、その波及と考えられ積極的な熊野での活動は行なわれなかったといえる。

曹洞宗、当地域の中枢を形成する寺院は、北牟婁郡紀伊長島町の仏光寺、尾鷲市の常声寺、熊野市の最明寺、安楽寺、南牟婁郡御浜の光明寺がその中心である。この地域での特質は、中規模な寺院が数ヶ寺集まって曹洞宗が他の宗派をおさえて大多数を占めた点にある。またこの地域の門派は通幻派が約九割を占め、残りを太源派が占めている。太源派の流れは、法系からみると遠江の可睡齋下に位置したもの、また遠江の石雲院から広泰寺を経た系統、大和の慶田寺を経た流れと三派あり、その中心は熊野の光明寺、最明寺である。また、通幻派は守護大内氏に関係して流入した熊野の安楽寺、海山町の竜福寺末二派と、本貫地での建法幢の形となった紀伊長島町の仏光寺、尾鷲の常声寺二流があり、結果として相競うように化導の実を挙げた成果が、曹洞宗の強力な伸長に直接結びついたといえる。

この地域で中心となる各寺院の開創年を調べて、曹洞宗の定着、発展伸長の目安とした時代に引き当ててみると、安楽寺の存在を除けば他の地域では発展伸長する時代に入っている頃に、この地域ではやっと拠点を確保した時代ということが出来る。明確な原因は把握できないが、他地域との比較から推察できる要因としては熊野三山の勢力が非常に強く、熊野別当が宗教上の支配をなし、政治にも深く関与していた点が挙げられる。

鎌倉幕府のいわゆる守護地頭を配しての農本主義政治は、熊野の水軍にとつてはなほだしく期待はずれであり、そればかりでなく守護地頭の地方政権化、またそこから育つ守護大名の強大化は熊野の力を著しく衰退させたといつてよいであらう。このような政治動向は熊野別当が純宗教的ではなく政治的であつたことによるが、そこに新たな宗教勢力がこの地に進出する機会を得たといえる。それがこの場合、曹洞宗進出であつたのである。

また、真言宗の勢力が織田氏のしめつけの影響、徳川の還俗政策から衰退することも挙げられ、後来の曹洞宗が真言宗寺院を転宗させて取り込む事態が生じているのが、それを裏付けている。

江戸幕府が開かれてから、各宗派に対して寺院法度が出され、特に慶長六年の高野山法度を筆頭に元和元年まで多くの宗派に対して布告された。家康が寺院法度を出した目的は、全国の寺院を政治的、経済的に規制し、伝統的特権を収奪し、寺院勢力を幕藩体制のもとにおくことであつた。また高野山、比叡山などは信長以来、秀吉、家康ともに勢力削減に専念した。例えば秀吉は、天正三年に高野山に対して事書（掟）を下し、政治に関与せず秀吉の命を奉じて本来の宗教活動に終始して従順にして他意なければ、高野山を攻めることを止めるとよい。と告げ、高野山に対して政権に協力するよう圧力

熊野地方に於ける仏教展開の特質（竹内）

をかけた如くである。

また幕藩体制の確立と共に、家康は高野山に対して慶長六年に、高野山法度を下すが、まず『一、衆徒行人諸公の事、往古の掟に任せて、格別たるべき事。』に始まり、最後に『右の条々、堅くこの旨を守り、仏法を紹隆し、永代忘失せず、天下安泰の懇祈を抽んずべきものなり。』と記してあり幕府の命に反逆せず、本来の仏法だけに専念して、宗教活動に終始せよとクギをさしているのである。

また同様に慶長十三年に出された比叡山法度では表現がより具体的となり、『一、学道に勤むといえども、その身の行儀、不律なるにおいては、速に離山に及ぶべき事。』とか『一、衆徒妄りに連署を結び、党類をもつて非儀を企つるにおいては、追放せしむべき事。』などの条文がみられる。

このような幕府の制圧によって、真言宗のこの地方における勢力は徐々に衰退してきたといえる。この影響が反映して、後来の曹洞宗教団の流入を容易にさせたといえるのである。また、曹洞宗の側においては、守護大名の外護を受けた流れと、出身地での化導を試みる流れが当地域で競い合う結果、大きな進展となつたといえるのであり、また時代の変化が有利に展開したといえる。

△キーワード▽ 中世仏教、熊野地方、曹洞宗

（愛知学院大学研究生）